

トラック 187-188

サン・タンドレ市の老人ホーム居住の 89 歳の女性

(ところどころ前後の脈絡がない箇所あり)

私は 1922 年 7 月 7 日に生まれた。父はサン・タンドレ出身で (彼の父は本土からやって来た), 母はサン・ドニ出身。私は 11 人兄弟姉妹の長女だった。父は 14 年の戦争 (第一次世界大戦) に従軍して, 戦後に母と結婚した。

母の兄アンドレはマダガスカルで建設業をやっている、アンタナナリボとディエゴを行き来していた。彼の妻 (内縁の妻) がどちらにいたかは分からない。彼の妻はマダガスカル人で、マダガスカルの女性が得意な刺繍を布 (の切れ) に施して、伯父がこっち (レユニオン) にいる母たちに送っていた。アンドレは私の妹の名付け親だったので、(彼の) 妻が刺繍した布をこっちに送っていた。彼はマダガスカルで建設現場を見に行った時に、作業員が働き始める前に、足場がしっかり組まれていて彼らが上っても良いかを確認するために上った時に足場が崩れて死んでしまった。

私は 7 歳の時に、父にサン・タンドレに連れて来られ、そこで育って、シスターの学校に行き、初聖体を受けた。その後、22 歳の時に修道院に入り、33 歳の時にそこを出て 42 歳で結婚した。

市役所の秘書は、私が教会のことをいろいろやっているのに (コーラスのこと、聖体や聖杯の準備、神父の世話など)、教会にはお金がないので私がお金を全くもらわずに神様のためだけに働いていることを知っていた。それで、彼女は、あなたは神様のために働いていて、聖具係としていろいろ仕事はしているけど、お金をもらっていないので、今、市長が子供を監督するための生徒監督を探している、と言って雇ってくれた。生徒監督 (の制度) は 60 年から始まった。私は、教会の仕事がどうなるか心配していたけれど、(生徒監督の仕事は) 10 時 45 分から 12 時 45 分までだから、教会の仕事の邪魔にはならない、と言われた。当時、学校は木曜日が休みだった (今は水曜日だけ)。それで、私は毎日 10 時 45 分に (学校に) 行って、12 時 45 分に (学校から) 帰った。

昔のレユニオンは、みんなサトウキビの畑で仕事をしていた。私の父は小作人として畑仕事をしていた。昔は、みんながサトウキビを植えて、女も男も (畑で) 働いていた。マダガスカル人も。特にマダガスカル人の女性が働いていた。どうやってマダガスカル人女性かを見分けるかというと、子供がいればその子を下において、赤ちゃんを背中に負ぶって、そのままサトウキビの仕事していたからだ。そして、母乳をあげる時に、おっぱいを出して作業中にあげていた。

母は 40 年の戦争は経験しているけれど 14 年の戦争は経験していない。戦争で生活は大変だった。塩がなく、チョコリはあったけど、塩も油もなかった。39、40 年の戦争の時に、私たちはサン・タンドレの大きな道を、いろんな器を持って海水を求めて海まで下りて行った。いとこ達もみんな教会前の海まで下りて、バケツやじょうろを海水で一

杯にして、サン・タンドレから帰ると、それを沸かしていた。沸かして、沸かして、沸かして、器の底に鉄しか残らなくなり（＝水分がすべて蒸発したら）、それを乾かせば塩になる。40年の戦争ではこうやって食べ物を確保していた。米もトウモロコシもなくマニオックを食べていたし、隠れて豚肉を食べることもあった。40年の戦争中はそういう感じだった。

トウモロコシの配給券は、一人当たり4.5キロだった。例えば、子供が8人がいれば、働いていたり金持ちだったりすると、配給券を8枚ちゃんと手に入れられる。配給券で食べ物や油が買える。でも、働いていない人や働けない人はどうするんだ。そんなことがよくあった。父は私に配給券をくれなかったし、それどころか私の配給券を取り上げていた。（私の）油や米や塩の配給券は父が全部取り上げていたんだ。それは、私が叔母の家に泊まったり、叔母と一緒にいたりしないようにするためだった。叔母は夫が亡くなってから一人であるのが怖かった。だから私は、叔母の家に泊まらせてほしいと父に言っていた。叔母の家は好きだった。土曜日はそこに泊まっていた。翌日の日曜日はミサがあったから。でも父はそれに反対していた。

私が22歳になった日、叔母は、そこまでする必要はなかったのに、私のために集めたお金を持って来てくれた。彼女の大工の夫が亡くなって、私のためにお金を集めてくれていたんだ。叔母は私に、どうやってお金を集めるか分かるかい、と聞いてから、5000フランの大きなお札を出して、これを取って、と私に言った。私はそれを大きな黒タイツに入れて、クルクル巻き、マットレスを持ち上げて、そこに（お札が入っている）黒タイツを入れた。（そうしたら）誰も分からないからね。その夜、叔母は私に言った「あなたはいつも本を持っているね。修道女になる気なのかい」。

その夜、4.5キロの米をもらいに並びに行った。まだ（この店は）あるよ。バザールの向かいの店。ご主人が亡くなったから、今は息子が店をやっているけど。当時は息子がまだ小さくて、ご主人が店をやっていた。22歳の私は店に着いて並び始めた。この辺りの人は、町に米があると言う噂が流れると、みんな慌てて米を求めに町に下りていく。でも町にも米が必要だし、私たちもお腹がすいている。だから、みんな押し合って並ぶことになる。

叔母は、毎晩5時に新聞を郵便局に取りに行かなければならなかった。郵便局は薬局の向かいにあった。新聞には、ゲタリ Guétali やル・プープル Le Peuple、そしてペタン元師の新聞もあった。新聞を取るのが終わったら、夜は花に水をやったりして、叔母と一緒に帰った。その夜、叔母は土曜日のミサのために神父の祭服にアイロンを掛けた。アイロンを良く掛けて用意をしていた。叔母は米を炊いて、胡椒を炒め、店にも行った。店では小さな塩漬けの肉を売っていた。小さな切れにしてね。塩漬けの豚肉だった。そこは中国人がやっていて、（肉は）一パック10センチムだったけれど、叔母は三つも買った。17時半になって、もらった米を炊いて、胡椒を炒めて、塩漬けの肉を中に入れて、今夜はこれを食べよう、と叔母が言った。大きな白いエナメルのお皿があった。

その半時間後ぐらい、激しい咳が聞こえて、叔母が私の上に倒れた。大家さんがやって来て、(モコという人だった。レニ・モコという名前)、「娘さん、彼女は死んじやいない、死んじやいない」と言ったけど、お母さん、お父さん、叔母さんが死んじやった！おじさん、叔母さんが死んじやった…。

次の日は日曜日で、朝早く、おじさんは一階に(遺体を)降ろした。彼はボンベルジェ神父に会いに行き、言った。「神父さん、私の姉、ジャン・バプティストの葬儀(をお願いします)のために伺つのです。」(それに対して、神父は)「アレクサンドルさんですか。私のお手伝いさん？」と。(おじさんは、)「そう。タベ心臓発作を起こしたのです」。(神父は)「(昨日、)彼女は私の寝室などをいろいろ整理してからここを出ただけけれど」と。(おじさんは)「タベ、真夜中に亡くなったのです」と。日曜日に、神父さんが早速ミサの途中で、「タベ私のお手伝いさんが亡くなりました」と、みんなに葬式を知らせた。彼女のことを(直接に)知らない人でも、みんなびっくりした。みんな驚いたよ。ミサが終わると、みんなが急いでクロワ・ジュビレまで上って、(叔母の遺体を)引き取りに行った。ボンベルジェ神父は(叔母を)迎えに行った。当時、葬式の時に、神父は黒いスータンに白いサプリスを着ていた。侍者も同じで、彼らも黒いスータンに白いサプリスを着ていた。ブラ・デ・シュヴレットのクロワ・ジュビレにある教会まで神父は上って行った。でもクロワ・ジュビレに着いたら、雨が降った後の小道をさらに上るとスータンを汚すことになるから、(それ以上)上れなかった。ここまで遺体を持ってくれば、と神父さんが言うと、みんなが「降ろします」と言った。小道を歩いて遺体を降ろし、そこから神父が遺体を受け取って教会まで運んで行った。神父は葬儀の間ずっと歌っている。歌っている、歌っている。教会に着くまで。神父さんが叔母の死をみんなに告げたんだ。これが私の人生だよ。22歳だった。そして、33歳の時に修道から出て、42歳で結婚して聖具係をやっていた。夫は病気もせずに69歳に亡くなったよ。